

中國典籍日本注釋叢書・論語卷

張培華 編

百一田中履堂撰

論語講義並辨正



中國典籍日本注釋叢書

論語卷

張培華 編

論語講義並辨正



圖書在版編目(CIP)數據

論語講義並辨正 / (日) 田中履堂撰. —上海: 上海古籍出版社, 2017. 8

(中國典籍日本注釋叢書·論語卷)

ISBN 978-7-5325-8374-4

I. ①論… II. ①田… III. ①儒家②《論語》—研究
IV. ①B222.25

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2017)第 042840 號

論語講義並辨正

[日] 田中履堂 撰

上海世紀出版股份有限公司 出版
上海古籍出版社

(上海瑞金二路 272 號 郵政編碼 200020)

(1) 網址: www.guji.com.cn

(2) E-mail: guji@guji.com.cn

(3) 易文網址: www.ewen.com.cn

上海世紀出版股份有限公司發行中心

江蘇金壇古籍印刷廠印刷

開本 890 × 1240 1/32 印張 13.75 插圖

2017 年 8 月第 1 版 2017 年 8 月第 1 次印刷

印數: 1—2,100

ISBN 978-7-5325-8374-4

B·989 定價: 68.00 元

如發生質量問題,讀者可向工廠調換



本書影印底本由日本早稻田大學圖書館收藏

序

『論語』は、『千字文』と並んで、日本に最初に入ってきた漢籍の一つと伝えられるほど、なじみ深い典籍である。

古来、日本人が学んできた漢籍には、ほかに『孝経』や『蒙求』『三字経』などがあり、幼少期の学童に教えられるべき幼学書として、近代以前は長い受容されてきた。しかし、これらは今ではすっかり忘れ去られて、眼にふれることも稀になってしまった。むしろ最も馴染みのある漢籍といえば『論語』が代表的となっている。

現代の日本で、『論語』がいかに関心されているか、示してみよう。例えば、学校では小学校や中学校の教科書に採り上げられている。また、ビジネス書をはじめ、『論語』の小説も少なからず出ている。漫画の『論語』も多くあり、孔子の伝記とあわせると、その数は膨大といつてよからう。

『論語』の注釈の中で最も有名で、最も多くの人に享受されてきたものは、朱子（朱熹）の『論語集注（しつちゅう）』であった。このことは、世界的に考えてみても、同じことが言えるだろう。かくいう私も、十八歳で大学に入学した際の最初の講義で学んだ漢文は、簡

野道明の補注による『論語集注』を教科書に、柳町達也先生から学而第一を二年間習ったものだった。

その講義で学んだことは、現代語や解説などに頼らずに、直接古典注釈書を学ぶことの意義と、長い注釈の歴史を持つ中国に劣らず、日本でも朱子を乗り越えようとした先人の営みの精華を知ったことだった。

本書の最初に収める松平頼寛(1703～1763)『論語徴集覽』には、日本における論語についての二大著述を対照させた集注が収められる。すなわち伊藤仁斎(1627～1705)『論語古義』と荻生徂徠(1666～1728)『論語徴』である。いずれも朱子の説を祖述することを潔しとせず、それを乗り越えるべく独自の思想を追究した先人の賜物といえる。

江戸時代、林羅山によって身分制度を正当化する朱子学は、江戸幕府の正学とされていた。そこでは、「上下定分の理」や、そのために名称と実質の一致を確立しようとした名分論が武家政治の基礎理念として貫かれていた。

しかし、仁斎と徂徠の両名は、ともに当時支配的であった朱子学的な經典解釈に批判的態度であつた。具体的には、両名は直接原典を考究するという原理主義に立つて朱子学に臨んだのである。ただし、両者の採った方法はそれぞれ異なるものであつた。

端的に言えば、仁斎の古義学は、疑念を持って原典にあたり、批判的な態度で読むことに努めたものといえ、徂徠の古文辞学は、原音原語と制度文物の研究によって、先王の道を知

ろうというものであった。また、中国語に堪能だった徂徠は仁斎に否定的な態度で臨んだことも特徴的であった。その結果、それぞれ方法・立場を異にしながらも、全人的理解を目指して体系に裏打ちされた思想を生み出したのである。本書に収載の『古義』『徴』の二書にもその傾向はうかがえる。

両名の考え方の差は随所に現れている。一例として学而第一第八章を採り上げてみよう。

「子曰、君子不重則不威。

学則不固。

主忠信。

無友不如己者。

過則勿憚改。

この部分の解釈は仁斎と徂徠とで異なる。詳しくは収載された両書を参照して考えてもらいたい。が、あえて一点だけ述べれば、この章の「学則不固」の部分には両者の考え方の違いが最も明確に現れているといえる。

まず、仁斎は、『論語』は孔子が当時の賢士大夫に向かって説いたもので、この章も孔子が説いたいくつかの言葉を弟子たちがつづり合わせたものと考えた。それに対して徂徠は、『論語』は孔子が以前からの古言を唱えながら教えたものであるため、一貫性を認めづ

らい部分や、重複した内容があることも当然と考えた。

その結果、仁斎は「学則不固」を、「学べば則ち固かたからず」と訓んで、きちんと学問をしないと堅固な考えを持てないと解釈した。それに対して、徂徠は「学べば則ち固こせず」と訓むことができる解釈を行った。孔子には定まった師はなかったもので、融通無碍な考え方を行う人であったと考え、学びを深めれば、狭い見識にとらわれた固陋な考えを持たなくなるというのである。

朱子の学問は、孔子の一言片句さへも一貫した意味と思想を持つものと解釈することに努めた。それに対して、日本の仁斎と徂徠はその立場を採らず、朱子とは異なる解釈を行ったのである。仁斎は孔子の平生の言葉を繋ぎ合わせたものとし、徂徠は以前から伝わる古言を孔子が唱えながら教えたものと考えた。徂徠の考え方を採れば、他の箇所にも重複のあることに説明が付き、同じ章の「過ちては改むるに憚ること勿れ」からうかがい知れる君子像とも矛盾しない。

また、全体的思想においても、朱子は宇宙に根拠づけられた道の体現者としての孔子を見ようとしたのに対し、仁斎は、その考え方を排斥して日常性と道德に関心を集中させた考えを採った。徂徠も同じく朱子とは異なる経学を示しながらも、仁斎にも反対の立場を採り、先王とは異なって統治者としての経験・実績はないものの、そのための道を後世に示した孔子の偉大さを伝えようと努めたのである。

こうした日本経学の豊潤な蓄積と独自性が、中国で知られることは少ないだろう。本書を編纂する意図はまさにそこにあるのだが、中国の人達だけでなく、多くの日本の人達にも興味を持っていただきたく思う。

平成二十八年師走 相田満

《論語》和日本

——代前言

一

翻開日本《古事記》應神天皇的章節，其中有『論語十卷』的記載。這是目前所知日本對《論語》的最早記錄。應神天皇是日本第十五代天皇，在位四十一年（約公元二七〇年至三一〇年在位），一百歲崩（《古事記》載一百三十歲）。論及《論語》和日本的關係，上述記載是不可忽視的，至於《古事記》的記載是真是假，已有諸多考證，限於篇幅，在此不贅。《古事記》是日本最早的書，由其記載，可推知《論語》流傳到日本至少一千七百年了。這裡不妨摘錄一段日本漢學大家諸橋轍次的話。他說：

《論語》是公元二八五年（應神天皇十六年）由百濟王仁博士傳到日本的。日本最早的書《古事記》成書於七一二（和銅五），以此推算，《論語》到日本要比《古事記》早四百

二十七年。也可以說，《論語》是日本人手裡拿到的第一本書。從那以後至今，《論語》差不多被日本人讀了一千七百年，終於家喻戶曉、人人皆知、可親可敬了。雖說《論語》是外來的書，可我覺得稱其為日本古典中的古典並不過份。

（諸橋轍次《中國古典名言事典》，講談社學術文庫，第十九頁）

諸橋轍次先生的這段話，述及《論語》自傳入到被日本人廣泛接受的過程。那麼一千多年來，日本人究竟是怎麼閱讀《論語》的呢？

二

正如《古事記》所記載的那樣，自從王仁博士將《論語》作為禮物敬獻給應神天皇的皇子以來，《論語》以及流傳到日本的中國典籍的讀者主要是日本天皇和皇室子孫。他們通常由大學博士等專業人士傳授。比如日本漢文史籍《日本三代實錄》第五卷清和天皇貞觀三年（八六二）八月十六日有如下記載：

十六日丁巳，天皇始講論語，正五位下行大學博士大春日朝臣雄繼侍講。

（《日本三代實錄》上卷，名著普及會，第一三一頁）

該書第三十六卷元慶三年（八七九）八月十二日同樣有陽成天皇讀《論語》的記錄：

十二日己巳，天皇始講論語，正五位下行大學博士大春日朝臣雄繼侍講。

（《日本三代實錄》下卷，名著普及會，第一八〇頁）

清和天皇和陽成天皇分別是日本第五十六代和第五十七代天皇。《論語》不僅僅為天皇閱讀，也是皇子的啟蒙讀物。比如從《御產部類記》中可知皇子出生一周之內，由明經博士、紀傳博士閱讀的中國典籍書目中就有《論語》：

延長元年七月二十四日，皇后（藤原穩子）產男兒（寬明親王），前朱雀院，內匠寮作御湯具，七日間明經、紀傳博士等相交讀書，千字文、漢書・景帝紀、文王卅（原字）子篇、古文孝經、論語置一卷、尚書、史記、毛詩、明帝紀、左傳等也。

（《圖書寮叢刊・御產部類記》，明治書院，第七、八頁）

延長元年即西元九二三年。寬明親王剛出生，耳邊就聆聽大學博士讀《論語》及各種典籍，可見日本古代天皇對皇子履行儒家經典教育的重視。寬明親王日後成為日本第六十一

代天皇即朱雀天皇。

不僅古代天皇及皇子耽悅《論語》及中國典籍，誦讀《論語》更是男性貴族修身的主要方式。這與日本古代沒有文字密切相關。正如齋部廣成在其《古語拾遺》的《序言》裡說：『上古之世，未有文字。貴賤老少，口口相傳，前言往行，存而不忘。』（《古語拾遺》，岩波書店，第一一九頁）自漢字傳入日本後，日本開始借用漢字表情達意。前文提到的《古事記》，從頭至尾都是用漢字書寫的。日本第一部和歌集《萬葉集》也是用漢字書寫的。但問題是，雖是漢字，中國人卻未必能看懂。比如，明代李言恭《日本考》中有如下日本古代歌謠：

月本日本，所乃打那天木，乃子革失也，我和慕人那，阿而多思葉白。

（〔明〕李言恭、郝傑編撰，汪向榮、嚴大中校注《日本考》，中華書局，一九八三年，第一二四頁）

恐怕任何中國人讀了以上歌謠，都會如墜五里雲霧而不知所云。其實這是一首日本古代情歌，大意是：『日月同天，想他那裡，我思念人，有人思我。』（出處同上）

這是因為，日本借用漢字表情達意時，已經有固定的日語表達形式了，只是沒有日語文字而已。這是一個值得深究的課題。

借用中國漢字，終究不方便，於是日本在平安時代發明了『假名』，即記錄日語的文字。

顧名思義，假名是相對於『真名』而言的，真名即漢字書寫的古文。十分有趣的是，日本創造的假名，依然與漢字藕斷絲連。毫不諱言，日語的假名，其本質是對漢字的『崩裂』。五十個平假名和五十個片假名，都基於一百個漢字。日語假名不變，漢字轉為繁體字。假名源於漢字，在日本學生《國語》裡，均有鮮明的解釋，只是千百年來，對於日本學生或對所有日本人而言，在他們的意識裡，與其說漢字是中國的，倒不如說漢字是日本的，俗話說習慣成自然。

假名終於替代了真名，成為日本的國語。但是，在假名剛剛開始的平安時代，『真名』與『假名』的地位截然不同。按古代日本律令的規定，國家政府機關的官方文書，一律為真名，且多為男性高級貴族把持，因此真名也稱為『男手』，相對真名而言的假名，則叫『女手』。日本古典文學《枕草子》及《源氏物語》即是『女手』創作的代表作。從《源氏物語》作者紫式部的假名日記（《紫式部日記》）中可見，當時她旁聽兄長的漢儒課程時，由於其記憶力好，每當兄長被問得不能回答而發窘時，她在一旁倒背如流。她作為文人的父親對其刮目相看，十分惋惜地說：『真可惜你不是男兒啊！』由此可見當時重視男子識『真名』女子習『假名』之一斑。

女性貴族宜用假名，男性貴族須用真名。從現存男性貴族的漢文日記中，我們仍然會發覺《論語》是皇室子孫必讀的中國典籍之一。比如日本第六十六代天皇一條天皇的第二皇子敦成親王誕生後，當時的攝政大臣，即一條天皇的岳父藤原道長在他的漢文日記《御堂關白記》中（現存作者部分親筆日記均為日本國寶），對敦成親王的讀書書目和讀書時間以及擔任博士均有詳細記錄。比如寬弘六年（一〇〇九）十二月一日，上午讀《漢書》，傍晚時分由名叫

爲忠的人讀《論語·大伯篇》（詳見《御堂關白記》，岩波書店，第二七一頁）。敦成親王日後成爲日本第六十八代天皇即後一條天皇。

鎌倉時代和室町時代的漢文日記裡，也依然可見閱讀《論語》的記錄。比如鎌倉時代公卿近衛家實在其《猪隈關白記》裡，於正治二年（一二〇〇）二月一日記：『博學而篤志，論語云云。』（詳見《猪隈關白記》，岩波書店，第六九頁）另外在建仁三年（一二〇三）八月二日還有『釋奠、論語』的記述（詳見《猪隈關白記》，岩波書店，第二七〇頁）。所謂『釋奠』是沿襲古代中國祭奠以孔子爲代表的儒家先哲的儀式，最早由奈良時代《大寶令》中的學令頒佈後，于大寶元年（七〇一）實行，中途停止，後又復活，反反覆複直到明治維新才餘韻告罄。

鎌倉時代以後的室町時代，後崇光院伏見宮貞成親王的日記於永享八年（一四三六）十月二日記：『讀書如例，論語第二卷講義。』（詳見《看聞日記》第五卷，宮內廳書陵部，第三二〇頁）

另外在室町貴族內大臣萬里小路（藤原）時房的日記《建內記》裡，也同樣可見其耽悅《論語》的記錄。比如在康正元年（一四五五）八月二十一日日記中有以下記載：『岡崎三品（周茂）終日來談，論語第七讀和了。』（詳見《建內記》第十卷，岩波書店，第一七八頁）

從以上零零碎碎的記述裡，大致可以瞭解，《論語》在日本先有天皇及皇室子孫閱讀，爾後普及到貴族階層，延綿不絕。但是，直到室町時代尚不見有學者潛心閱讀《論語》後，用漢文加以解釋的著作。

如果把『論語』作爲關鍵詞輸入日本國立國會圖書館的藏書檢索欄裡，現在顯示的數目是三四四一件。這個數目還在不斷增長，因爲每年都有新的有關《論語》的書籍出版。比如二〇一六年六月，岩波書店出版了井波律子氏翻譯的《完譯論語》，同年十月，筑摩書房出版了齋藤孝氏翻譯的《論語》。日本《論語》的譯作，可謂雨後春筍，層出不窮。而且有趣的是，翻譯《論語》的譯者未必會說漢語，他們能夠翻譯《論語》，其氣魄來自對中國古文的日語解讀——訓讀。

說起訓讀，得回到平安時代日本人所發明的假名。前文提到過的源於漢字的一百個假名中，其中五十個片假名就是爲訓讀『真名』漢文服務的。漢文訓讀的發明，不能不說是日本人的智慧，因爲所有的中國典籍，一旦配上訓讀，如何閱讀的問題就會引刃而解。因為有訓讀這一特殊的閱讀方法，所以一個日本人即使完全不會說漢語，也能夠看懂《論語》。訓讀並不難，即按照日語的順序，在漢字左右下角分別添加訓點和送假名。其目的是爲了符合日語的順序，所以有必要顛倒漢語的語序，因爲日語和漢語的語序不同，比如漢語動詞後面跟賓語，而日語常常是賓語在前動詞在後。而訓點符號恰是爲顛倒漢語語序迎合日語順序而起作用的。

訓點符號屈指可數，簡言之，不外乎以下訓點。首先是返点『レ』，意为返回，即在两个汉字之间有返点的话，先读下边的字，然后再返回读上边的字。其次『一、二、三、四』點，即按照點數的多少，先讀有一點的字，次讀有二點的字，再讀有三點的字，最後讀有四點的字，以此類推。同樣的方法還有『上、中、下』點和『甲、乙、丙、丁』的訓點標誌。這些訓點基本都是按照其順序先後讀字罷了。如此看來，訓讀的方法並不困難，不過訓讀後的漢字得配上相應的送假名即片假名部分，需要有深厚的日語語感，所以日語能力的高低，左右著訓讀後的翻譯水準。由於古代漢文都是豎排，日語亦然，所以按訓讀規則，一般將訓點標在漢字的左下角，片假名標在漢字的右下角。

日本的訓讀雖易學，但其方式比較煩雜，似乎沒有統一的模式，又常常與師承直接相關。比如昭和時代的學者，就有東大（東京大學）和京大（京都大學）畢業生訓讀的不同方式。

訓讀起源于平安時代，最早誕生於漢儒博士之家，派系林立，方法不一，猶如祖傳秘方不外傳，承繼的都是同門子弟。雖然方法不一，但是對理解中國古文似乎大相逕庭。好比中國大陸使用中文拼音，而中國臺灣則使用注音符號，形式不一，但對於同一個漢字所發出的聲音還是一致的。毫無疑問，日本人發明的訓讀，是日本人理解中國典籍的一條有效捷徑。時至今日，漢文訓讀仍然是日本高中生考大學的必考課程。可見，用訓讀的方法理解中國古文的技能，幾乎都潛伏在每一個日本人的頭腦裡。因此，對中國人來說，理解日本人，要知道他們會訓讀的本領。比方說，一個中國人古文功底很差，而一個日本人，訓讀能力很強，在理解